

1年2組

 思い出いっぱい あさがおさん
 ～ ありがとう がんばったね ～


思い出いっぱい あさがおさん



ガーデニングアドバイザー柳澤三千子さんと一緒に種を植えてから216日目の日、あさがおさんとの生活を終わりにしました。あさがおさんが鉢にいる最後の時、創作曲「♪思い出いっぱい あさがおさん」をあさがおさんのために歌いました。そして、固くなったつるを支柱からほどき、根を鉢から取り出し、一人一人つくった思い出箱へと移しました。その時の思いを綴った子どもたちの言葉を紹介します。

T…朝顔さん、216日までいてくれて、ありがとう。しんじゃったけど、ぜったいわすれないよ。大すき朝顔さん。またね。朝顔さん。

K…ちょうかなしかったです。今までずっといっしょにすごしてたのに、今日からはこの中に入ってるからです。…名前を思い出して、だいぶまえのこと、うれしかったこと、たのしかったこと、あさがおさんの気持ちをかながえたこと、あさがおさんといっぱいすごしてたのしかったです。…さいごにたのしいことをはなしました。ばいばい、がんばったね。

Y…花がさいたときにうれしいなっておもったけど、じぶんも水やりをしていなくて土がからからだったから、ごめんねっておもってあやまったら、いいよってゆるしてくれて、あさがおさんってやさしいんだっておもったよ。

E…たいへんだったけど、あさがおさんのためだからたのしかった。どうしてかということ、あさがおさんが大すきだから。(思い出箱を)つくってるとき、あさがおさんの気持ちがわかった。どうしてかということ、しゃべってるから。

Y…きょうのあたらしいいえはどう?あさがおさんのねっこは、とってもきれいだったし、おうちもつくれたよ。216日生きてくれてありがとう。

K…いっぱいそだってくれてありがとう。土からとったり、しちゅうをとるのがむずかしくなって、そのぐらい、はっぱやつるを大きくしてくれてありがとう。…つかわなかったつるやくき、かれちゃったつぼみとかむだになっちゃってごめんね。…たねはたいせつにそだててあげて、あさがおさんの子どもから子どもをつかってあげて、さらになかまをふやしてあげるからね。…見れなくなるまで見るからね。

S…あさがおのうたを先生がながしてくれたから、あさがおのおもい出をおもい出して、おもい出ばこにこころをこめておもい出を入れといて、あさがおは、心で生きてほしい。

I…あさがおは、みんなの「心」から生まれたものだとおもう。だから、あさがおさんは、みんなの「心」がいっぱいになって、きつときつとたねいがいにもあさがおじたいぜんぶが、あさがおの「赤ちゃん」だとおもう。

音楽会に向け、ステージに立って歌い始めた子どもたち。「心の中にあるあさがおさんに届けたい」「見ているおうちの人たちにも伝えたい」と、誰に、何のために歌うのかを語る姿にも出あいました。相手や目的を語っていることがすごいと思いましたが、その根底にいるのは、「歌いたいわたし」なのではないかと考えます。歌うということがとにかく楽しくて、心地よくて。さらに、それを共有している仲間の存在が、より楽しさ、心地よさを駆り立てているように見えます。子どもたちは、歌う楽しさ、心地よさに浸る中で、あさがおさんとのこれまでの日々、おわかれの時のこと、柳澤さんへのありがとう、あさがおさんへのありがとうを噛みしめているような気がします。

「歌おうよ」「天まで届け。1, 2, 3」

あさがおさんが枯れてしまった後もずっと一緒にいたいという思いを抱く子どもたちが多く、図工で思い出箱を制作し、あさがおの一部または全てを入れて、これからもそばにいられるようにしました。その際に、思い出箱には入らなかったあさがおさんとの別れ方について、埋めてお墓をつくるという考えが出ました。これでまとまると予想していましたが、見えなくなってしまうし、踏まれてしまうかもしれないから埋めたくないという考えをもつ子が多くいることが分かり、代案もなく行き詰まりました。後日わたしから、お焚き上げで天に送る方法もあるということをお伝えしました。燃やすことに抵抗を示す子もいて再度思いを聞き合ったが、「あさがおさんを天国に見送ってあげたい」、「自由に動けるように楽にしてあげたい」といった考えからお焚き上げで別れることに決まりました。

グループに分かれて組んだ焚き木に火をつけ、あさがおを入れた時、「歌いたい」というつぶやきが聞こえました。するとMさんが、「Aちゃんの（つくった）あさがおのうた、歌おうよ」と言って、歌い始めました。グループの友だちも声を重ね、火を囲みながらの「あさがおのうた」。一緒に歌っていると、今度はとなりの焚火の方から同じ歌が聞こえてきました。Mさんたちの歌を聞いて歌いたくなっただけのかもしれませんが、天にのぼっていくあさがおさんを見て歌が湧き上がってきたのかもしれませんが。気づけば至るところで、様々なメンバーで、あるいは一人で、「あさがおのうた」と「思い出いっぱい あさがおさん」を歌っている子どもたち。音楽会のような合唱とはまたちがう、あの時の歌。一緒に歌っていて、とても心地よかったです。歌とは、本来そういうものなのかもしれないと思えた。表したい思いが湧いてきて、それを音にのせて楽しむ、伝える。そうして生まれてくるものなのかもしれません。また、天にのぼるあさがおさんを見て、伝えたい思いが生まれた時、それを表せる共通の言葉であり、歌があることに価値を感じました。思いを共有できる歌があるからこそ、気持ちをからだで思い切り表現でき、その心地よさを味わえます。

そして今度は、「天まで届け。1, 2, 3」と手をつないで声を重ねる子どもたちの姿が目に見え、飛び込んできました。自然体験園で仲間と何度も唱えたこの言葉。天に上る煙を雲に見立てると共に、「くじらぐも」の学習を想起し、子どもたちの内をつなぎ、それが子ども同士で連鎖したのでしょうか。

あさがおのお焚き上げが音楽になり、国語の学びが思い起こされて表出される。子どもと歩みを決めていく中で、そんな場面に出あうことができました。

